

日本版 WISC-IV の改訂経緯と特徴

刊行委員会代表 上野一彦

2011.12

昨年 2010 年 12 月 1 日、日本版児童用ウェクスラー知能検査第 4 版 (WISC-IV) が 5 年の歳月を費やし、ついに完成した。原版 WISC-IV の発刊が 2003 年であったから遅れること 7 年、日本版 WISC-III から IV への改訂は原版と同じく 12 年経過している。

ウェクスラー知能検査は、多くの類似尺度が認知尺度として開発されるなか、世界 20 数カ国で使用される国際的な知能検査としてその位置を確固たるものとしている。また幼児用尺度 WPPSI、成人用尺度 WAIS とともに、ウェクスラーファミリーとして、幼児から成人まで人間の全生涯を幅広く測定する検査としても広く知られている。

図 1 は、WISC に関する改訂と日本版作成の歴史をタイムラインとして示している。



図 1 WISC の改訂と日本版作成の歴史

日米ともわずかに 12 年という短い期間で III から IV への改訂がなされた。その背景には一般的な時代的・文化的変化に伴うサンプルとしての検査項目の改善という理由のほか、知能・認知検査を取り巻く社会的・教育的ニーズの大きな変化があったことを知っておくべきである。

Flanagan と Kaufman (2009) の言葉を借りれば、知能測定による解釈には 4 つの波があったという。第 1 の波はスタンフォードビネーに代表される知的障害の IQ による判別であり、第 2 の波はウェクスラー知能検査の登場による言語性 IQ (VIQ) と動作性 IQ (PIQ) を中心とした臨床的プロフィール分析であった。そして、第 3 の波は WISC-R から WISC-III にいたる心理測定的プロフィール分析であり、多変量解析による 3 因子構造から WISC-III の 4 因子構造、そして 4 つの群指数 (VC、PO、FD、PS) による解釈ではなかったろうか。この安定した 20 年間と WISC-III による解釈の時代は、LD の教育支援を背景にその判断ツールとしての重要性が増した時期でもあった。しかし、それは続く第 4 の波が来る前の「嵐の前の静けさ」でもあった。

第 4 の波は理論的応用と呼ばれる。Wechsler、Kirk、Kaufman らが最終ゴールとして常に意識してきたものは、教育支援に役立つアセスメントであった。しかし、一方で知能と学力のディスクリパンシーモデルによる操作的な LD 判定の隆盛は、アセスメント偏重を生み、教育支援の成果こ

それが重要であるという批判とともにプロフィール解釈の科学性への疑問にまで及んだ。

21世紀に入ってから RTI（子どもの指導結果を見て介入する）を重視する動向のなかで、指導に役立つ情報、つまりしっかりとした理論に裏付けされた心理アセスメントの開発が強く求められ、さまざまな心理検査類が開発と同時に短期間のうちに改訂を余儀なくされたことも事実である。WISC-IV がわずか 12 年という短い期間で全面改訂された背景には、このような事情があった。

WISC-IV は、これまでの VIQ と PIQ に象徴される知能概念を一新し、図 2 にあるような 5 つの合成得点（全検査 IQ：FSIQ、言語理解指標：VCI、知覚推理指標：PRI、ワーキングメモリー指標：WMI、処理速度指標：PSI）を中心に、7 つのプロセス得点による拡張解釈を可能にする新検査として、新しい解釈理論構成のもとに標準化された。

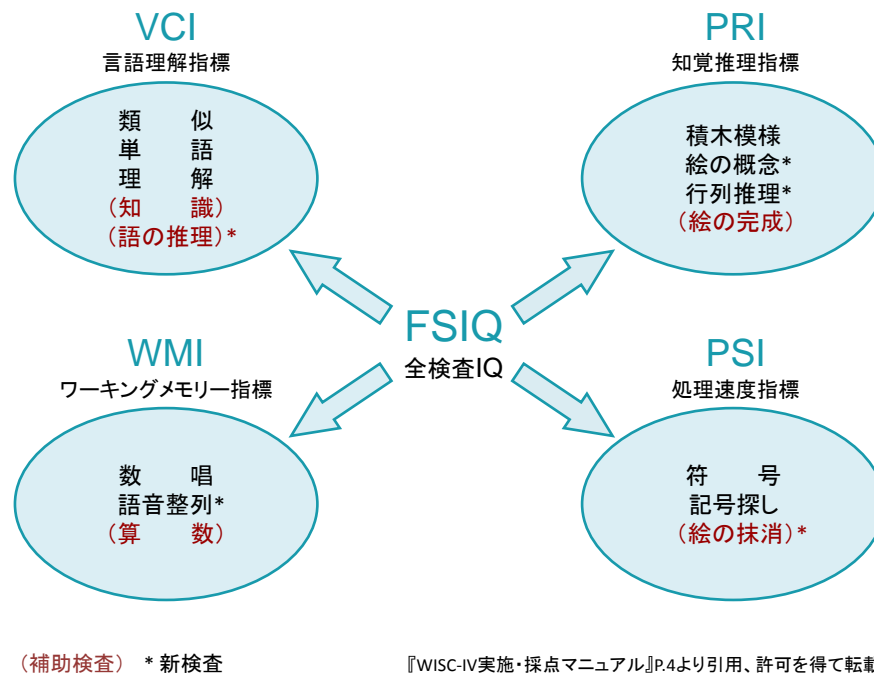


図 2 WISC-IV の枠組み

今後の解釈については、この 5 つの合成得点を中心に行うことになる。米国では IQ とは何かという議論は常に厳しくなされており、DN-CAS や KABC-II、本邦では翻案化されていないウッドcockジョンソン検査にしても、いずれも知能を標榜せず、認知能力検査を名乗っている。そうした動向のなかで、代表的な知能検査として存在するウェクスラー知能検査は世界最強の知能検査といっても過言ではなかろう。

VIQ や PIQ は因子論的に不十分であるという理由と、「算数」の評価点が外れ値（他の下位検査の評価点とは著しくかけ離れた得点）であった場合、VIQ と群指数「言語理解」に大きな差が生じる。同様に、「符号」の評価点が外れ値であった場合にも PIQ と「知覚統合」に大きな差が生じることがあり、解釈を混乱させていたという理由などから廃止という大きな変化があった（特別支援教育士資格認定協会、2012）。聞くところでは、FSIQ についても存続をめぐってかなり激しい議論があったようだが、最終的に残すことが決定された。それは階層的な因子分析によっても一般知能因子（g）の妥当性が確かめられたからであり、今後わが国で検証研究の大きな課題ともなっている。

ところで、4 つの群指数に替わる新しい指標得点の意味については『理論・解釈マニュアル』に掲載されているが、それらをまとめたのが表 1 である。

表1 WISC-IVの指標得点の意味

指標得点名 (略記号)	意味
言語理解 (VCI)	①言語概念形成 (結晶性能力の一部) ②言語による推理力・思考力 (流動性能力) ③言語による習得知識 (結晶性能力の一部)
知覚推理 (PRI)	①非言語による推理力・思考力 (流動性能力) ②空間認知 ③視覚-運動協応
ワーキングメモリー (WMI)	①聴覚的ワーキングメモリー (作業中の一時的記憶保持) ②注意、集中
処理速度 (PSI)	①視覚刺激を速く正確に処理する力 (処理速度、プランニング) ②注意、動機づけ ③視覚的短期記憶 ④筆記技能、視覚-運動協応

『WISC-IV 理論・解釈マニュアル』P.92～94 をもとに作成 (特別支援教育士資格認定協会、2012)

米国では、WISC-IV には 2 つのバージョンがあるとさえいわれている。1 つは標準化された WISC-IV であり、他の 1 つは WISC-IV の下位検査を異なる実施法で行ったり、他の検査を加えたりしたインテグレートッド (統合版) と呼ばれる拡張版である。刊行委員会としては、これらの新しい解釈の方向も模索しながら、より科学的で、より構造化された解釈法を、このテクニカルレポートによって皆さんにもお伝えしていきたい。

同時に、さまざまな新しいアセスメント情報や専門用語の解説、興味深い臨床例などを誌上で報告することにより、WISC-IV の使用者相互の共通理解を高め、臨床的解釈力を上げていくことも、このテクニカルレポートを新たに発行する趣旨でもある。

最後に、この 5 年間、われわれと共に開発に参加していただいた多くの方々、ならびに心理テスター (200 名近い特別支援教育士 [S.E.N.S] の方々にデータ収集にご協力いただいた) に、あらためて厚く感謝いたします。これからはこの WISC-IV を通して、子どものためのアセスメントツールの発展を皆さんと共に歩んで参りたいと思います。

<引用文献>

- Flanagan,D.P., Kaufman,A.S. (2009). Essentials of WISC-IV Assessment (Second Edition). New York: John Wiley & Sons. 上野一彦監訳 (近刊). エッセンシャルズWISC-IVによる心理アセスメント. 日本文化科学社.
- 特別支援教育士資格認定協会編 (2012). 特別支援教育の理論と実践 (第2版). 金剛出版. (印刷中)

日本版 WISC-IV テクニカルレポート #1

発行日: 2011年12月9日

発行者: (株) 日本文化科学社

編集責任者: 上野一彦 (日本版 WISC-IV 刊行委員会)

※本レポートの著作権は (株) 日本文化科学社に帰属します。掲載内容を許可なく転載することを禁じます。